

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 10 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009 ～2011

課題番号：21320123

研究課題名（和文） 出雲鰐淵寺の歴史的・総合的研究－日本宗教の歴史的・構造的特質の
解明のために－研究課題名（英文） A Historical and Comprehensive Study of the GAKUENJI Temple in the
IZUMO Country ; For the Elucidation of the Historic Structural Characteristic of the
Japanese Religion

研究代表者 井上 寛司（INOUE HIROSHI）

島根大学・名誉教授

研究者番号：40027967

研究成果の概要（和文）：天台宗の古刹である浮浪山鰐淵寺は、中世出雲国一宮出雲大社の本寺として創建され、極めて重要な役割を果たした。本研究は、鰐淵寺に対する初めての本格的な総合学術調査であり、鰐淵寺の基本骨格や特徴、あるいは歴史的な性格などについて、多面的な考察を加え、その全容解明を進めた。

研究成果の概要（英文）：This is the first full-scale study on HUROSAN GAKUENJI, an old historic temple of TENDAI sect, which was founded in the Middle Ages, as principal temple of IZUMO TAISYA shrine, Ichinomiya of the IZUMO country. GAKUENJI played an extremely important role. We have investigated the whole aspect of this temple through many-sided researches especially on its basic structure, features and historical character.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
2010 年度	5,900,000	1,770,000	7,670,000
2011 年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
年度			
年度			
総計	12,900,000	3,870,000	16,770,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：中世出雲国、出雲大社と鰐淵寺、出雲国一宮制、神仏隔離、神仏習合、顕密寺院、蔵王信仰

1. 研究開始当初の背景

(1) 鰐淵寺文書などの文献史料を用いたこれまでの研究によって、中世出雲国一宮出雲大社との「神仏隔離原則に基づく神仏習合」など、中世鰐淵寺の特異な歴史的な性格や、それが占める歴史的な位置・役割の重要性等についての概要が明らかにされてきた。ここにいう「神仏隔離原則に基づく神仏習合」とは、「国中第一之霊神」である出雲大社と、同じく「国中第一之伽藍」と称された鰐淵寺が、それぞれ神社・寺院として、地理的・空間的・機能

的に明確に区分されると同時に、中世出雲大社の祭神スサノオ（古代と近世以後はオオクニヌシ）が鰐淵寺の本尊蔵王権現と同体とされ、日時を定めて多数の鰐淵寺僧が直接出雲大社まで出向き、神官と手を携えて大社神前で祭礼を執り行うなど、表裏一体の相互補完的な関係を構築していたことをいう。

(2) しかし、一步踏み込むと、その具体的な内容にはなお多くの不明な部分を抱えており、中世鰐淵寺の基本骨格や構造についてさえ

なお未だ十分に解明し得ていないというのが現状だと考えざるを得ない。

(3)その最大の要因として考えられるのは、主に次の3つの点である。まず第1に、鱒淵寺の内外における鱒淵寺関係文書の調査・収集が十分でなく、基礎的データの集積という点で大きな限界を抱えていることである。第2に、文献以外の寺宝類や建造物、あるいは自然環境など、鱒淵寺の全容を知るために不可欠な調査もまた大きく立ち後れていて、各分野の専門研究者による調査・研究が強く求められていることである。そして第3に、これまで鱒淵寺境内の発掘調査が行われたことはまったくなく、そうした考古学的な知見の欠如が鱒淵寺の全容解明に大きな障害になっていると考えられることである。

2. 研究の目的

(1)本研究は、上に指摘した3つの問題点を解決することにより、鱒淵寺の歴史の実態を可能な限りトータルな形で明らかにすることを目的とする。その際、時間的な制約と問題の重要性とを鑑み、本研究では中世に焦点を合わせて研究を進めることとした。ここでいう中世鱒淵寺の特徴とは、それまで鱒淵山と呼ばれた修験の道場に大規模な伽藍が創建され、出雲大社の本寺としての浮浪山鱒淵寺が登場し(鱒淵山から鱒淵寺への転換)、先述した「神仏隔離原則に基づく神仏習合」が最も明確、かつ典型的な形で機能したこと、しかし戦国期に至り、戦国大名尼子氏が強権的に「神仏隔離原則」を否定し、大社境内に多数の仏教施設を建立、それに対する出雲大社神官側からの激しい反発によって、近世初頭の寛文5年には全国に先駆けて「神仏分離」が断行され、出雲大社と鱒淵寺との一体的な関係が解消されたことをいい、この寛文5年(1665)までの鱒淵寺を主たる考察の対象とすることとした。

(2)中世を中心とする出雲鱒淵寺のトータルな形での実態解明という本研究の目的を、もう少し具体的に述べれば次の3つに整理することができるであろう。その第1は、鱒淵寺所蔵の、あるいは鱒淵寺に関係する文献史料を全国的な視野に立って網羅的に収集すること、そしてその翻刻を通して、中世鱒淵寺の実態解明のための基礎的データの構築と公開に努めることである。鱒淵寺文書は鎌倉初期から戦国末・近世初頭にいたる400点余の多数を数え、地方有力顕密寺院の実態を解明する上に極めて重要な位置を占めるものであるが、曾根研三編『鱒淵寺文書の研究』(1963年)が存在するとはいえ、多くの誤植・誤読が含まれているなど、かねてよりこれに代わる史料集の刊行が強く求められて

きた。また、全国的な視野に立った鱒淵寺関係文書の収集(叡山文庫等を含む)という点でも作業は大きく立ち後れており、早急の事態の改善が強く求められているところである。

(3)具体的な研究目的の第2は、文献以外の寺宝類(彫刻・絵画・工芸)や建造物、考古遺跡、自然環境など、鱒淵寺の現状を歴史的な視点に立って多面的に調査・分析し、可能な限り立体的にその全容を明らかにすることである。

(4)そして第3は、以上に指摘した2つの研究成果を結びあわせることによって、これまで不明とされてきた鱒淵寺の歴史的な性格や特徴を明らかにすること、とりわけ中世鱒淵寺の最も重要な特徴の1つである出雲大社との関係について、さらに踏み込んで検討を加えることである。

3. 研究の方法

(1)本研究では、上に掲げた目標をより効果的な形で達成するため、とくに次の3つの点に留意して調査・研究を進めることとした。その第1は、出雲市文化環境部文化財課との緊密な連携のもとに、協同して調査・研究を進めることである。これは、出雲市文化財課が文化庁などからの補助を得て独自に行う鱒淵寺境内の発掘調査と本研究とを有機的に繋げ、ともにその研究成果を共有し合うことによって、ともにより大きな研究成果が得られるよう配慮したことによるものである。そのために、研究協力者とは別に、出雲市文化財課の発掘担当責任者に「特別研究協力者」として本研究の準メンバーとなっていただき、日常的な連携を密にするよう努めた。

(2)第2に、本研究の中に文献・建築・美術・考古・自然環境の5つの研究班を設け、それぞれの研究班が各研究班リーダーのもとに独自に目標やスケジュールを定め、調査・研究を推進する態勢を整えたことである。さらに、考古班には石造物調査のための小グループを、また建築と考古研究班に跨る形で庭園調査小グループも設けることとした。同じく自然環境班では、地質と植生というそれぞれ性格の異なる2つの小グループを設け、調査・研究を進めた。

(3)第3は、各研究班相互の連携を密にするとともに、研究班合同による共同討論の場を設けることによって、各研究班の研究成果の共有と合わせ、総合的な観点からの考察が可能となるよう心懸けたことである。本研究のメンバーは人数が多く、また居住地が相互に遠く隔たっていることから、とくにこの点に留

意するよう努めた。そのために行ったのは次の3つのことである。①年に1回、合宿形式の合同研究会を開催し、各研究班での取り組み状況と研究成果を報告し合い、研究の到達点と今後に残された課題を明確にするよう努めた。②研究班ごとの調査はもちろんのこと、各研究班合同の調査（文献班と建築班、文献班と美術班、文献班と考古班、建築班と考古班など）も積極的に企画し、多様かつ多面的な形で議論が組織できるよう努めた。③日常的には、主としてメールなどを用いて、事務局（研究代表）と各研究班リーダーあるいは研究会メンバー全員との連絡を密にし、可能な限り情報を共有するとともに、新たな研究成果などについても速やかにメンバー全員が共有し、またメールを用いて学問的な意見交換なども行うよう努めた。

4. 研究成果

(1) 文献班としては、基本的に寺内文書の悉皆調査を実施し得たこと、また唐川・河下町などの膝下村落における中世鰐淵寺関係文書（平田図書館架蔵近代行政文書を含む）の調査もほぼ終了したこと、全国的な視野に立った寺外の鰐淵寺関係文書の調査という点では、叡山文庫に中世に遡る文書の存在しないことが確認できたこと、従来まったく知られていなかった東山御文庫所蔵の比叡山文書の中に鰐淵寺関係文書が約20通含まれているのを確認したことなどを指摘することができる。その結果、これまでに収集し得た鰐淵寺文書並びに鰐淵寺関係文書は、寛文5年までで総計675点（金石文を含む）を数え、それらは平成24年度に学術振興会に出版助成金を申請し、平成25年度に京都・法蔵館から出版する予定となっている。

(2) 建築班としては、根本堂以下の鰐淵寺境内の主要建物の実測を行い、棟札の悉皆調査と合わせて、現存する堂社の建築的特質とその造営時期及びその歴史の変遷などが専門的な見地に立って解明された。これは鰐淵寺にとって初めてのことであり、正確な図面が作成されたことを含め、本科研の最も重要な成果の1つといえる。その結果として、現存する堂社の中では釈迦堂が最も古く、17世紀中頃に遡ること、また現存する建物は19世紀前半の天保年間まで降るが、摩陀羅神社が常行堂から分離・独立して創建されるのが、出雲大社との「神仏分離」期まで遡ることが明確となったことなどがとりわけ注目されることといえる。

(3) 建築班庭園グループでは、坊の中の庭園7ヶ所の存在を確認し、以下のような点が明らかとなった。これらの庭園は、①坊の中

の立地により、山麓部・山際に分れ、給水の可能な山麓部においては池泉が、山際では枯山水と対岸の景色を取り入れる借景式の様式が認められる、②書院などの建物から庭を觀賞する座観式と、軒下の飛石や庭中の手水鉢までの飛石・短冊石のような書院式路地の様式も見られる、③庭園意匠では投石をもつ立手水鉢など近世末から近代にかけて作庭された出雲地方の意匠に類似するものがある。これらの点は、部分的には旧是心院庭園などにおいて従来から知られてきたところであるが、トータルな形で確認されたのは今回が初めてのことで、今後の発掘調査にも大きな手がかりを与えるものといえよう。

(4) 美術班では、根本堂や蔵王堂・開山堂・本坊など、境内すべての塔頭内に所蔵されている彫刻・絵画・工芸などの悉皆調査を行い（一部の秘仏を除く）、専門家の手になる詳細な写真撮影も行った。その結果、以下のようなことが新たに判明した。まず彫刻では、平安中後期の10～12世紀に遡る神像の古例が多数存在すること、平安時代後期の11～12世紀や鎌倉時代13世紀の銅造及び木造の不動明王像が存在していて注目されること、しかし極めて重要な尊格であるにもかかわらず、蔵王権現像は一体も確認することができず、その理由は明らかでないことなどである。次に絵画では、全体で24件52点の存在を確認したが、そのほとんどが仏教絵画、そしてその大多数が密教絵画であること、軸木や裏書きなどに認められる墨書等から、貴重な情報の得られるものが少なくないこと、多湿な自然環境とも関わって保存状態の芳しくない作品が少なくないことなどである。工芸に関しては、五鈷鈴・五鈷杵や閻伽桶など、密教修法に用いられた密教法具に特徴的で重要なものが認められること、多数に上る鏡像や懸仏は数回に分けて蔵王宝窟に奉養されたものと考えられることなどである。

(5) 考古班では、出雲市文化財課が行う発掘調査と共同する形で作業が進められた。発掘調査は和多坊跡と等澗院跡隣接平地の2ヶ所で行われ、ともに大規模な平坦面造成と伽藍造営の行われたのが12世紀後半まで遡ること、また分布調査などからこれまで北院の所在地と推定されてきた唐川地区に僧坊跡の存在を確認することができず、南北両院ともに当初から蔵王宝窟のある別所地区に集中して造営されたことなどが明らかとなった。一方、石造物グループでは、境内外に及ぶ踏査と分布調査を通して、新たに松露谷地区において14～17世紀に及ぶ五輪塔・宝篋印塔が存在していることを確認した。

(6) 自然環境班のうち植生グループでは、古絵図や微粒炭分析の考察などを通じて、鰐淵寺周辺地域ではかつて針葉樹の割合が大きかったのが、草原や灌木類の多い植生へと変化していったことが解明された。また地質グループでは、古絵図の分析や現地踏査などを踏まえて、鰐淵寺と出雲大社とを結ぶ古道の検討を行い、近世には遙勘越と伊努谷越が主要な道路として機能したこと（それは中世にも遡ると推察される）を明らかにした。

(7) 以上に指摘した諸論点を踏まえ、改めて鰐淵寺の全体についていうと、本研究の成果としてとくに重要なのは次の3点だといえよう。第1に、従来鰐淵寺の成立（修験の道場としての鰐淵山から、出雲大社の本寺としての浮浪山鰐淵寺への転換）は、文献史料に基づいて12世紀後半であろうと推定されてきた。しかし、この推定を裏付ける確かな資料に欠け、推測の域を出るものではなかった。それが、鰐淵寺境内の2ヶ所の発掘調査によって、考古学的にも誤りでないことが確認され（上記5参照）、大規模な伽藍をともなう鰐淵寺の成立時期が明確なものとなった。

(8) 鰐淵寺の全体に関わる第2の重要な成果として、南北両院の問題がある。これまた従来は、成立期の南院が別所地区に存在するのに対し、北院は唐川地区にあり、南北朝期に至って南北両院が統一され、現在のように別所地区に集中することになったと考えられてきた。しかし、発掘調査や分布調査などによって、12世紀後半の鰐淵寺成立期当初から、南北両院がともに浮浪の瀧や蔵王宝窟のある別所地区に集中して存在したことが明確となった（上記5参照）。

(9) 以上のことから、第3に、「国中第一之伽藍」としての浮浪山鰐淵寺の成立が「国中第一之霊神」としての出雲国鎮守（一宮）出雲大社を前提とした、その体制整備（「神仏隔離原則を踏まえた神仏習合」）のためのものであること、これに対し寛文5年の「神仏分離」とは寺院（鰐淵寺）と神社（出雲大社）との一体的な関係の断絶を意味するものであったことが、改めて確認されることとなった。新しくスサノオを祀るところとされた摩陀羅神社が常行堂から分離・独立して建造されるのと（上記2参照）、出雲大社の祭神がスサノオからオオクニヌシに再転換し、それまでスサノオ＝蔵王権現を祀る最も重要な聖地とされた蔵王宝窟の機能が大きく後退するのとは、同じく寛文5年の「神仏分離」を契機とするものであろうことが明確となったのも、改めて注目されることといえよう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

- ① 野坂俊之・石原聡、鰐淵寺の総合調査と発掘調査、遺跡学研究、査読無、N08、2011年11月、pp212-215
- ② 関根俊一、鰐淵寺の密教法具について、山陰研究、査読無、No3、2010年12月、pp19-28

〔学会発表〕（計 1 件）

- ① 井上寛司、常光寺所蔵（鰐淵寺旧蔵）大般若経について、島根県中世史研究会、2011年12月3日、島根県民会館

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井上 寛司 (INOUE HIROSHI)
島根大学・名誉教授
研究者番号：40027967

(2) 研究分担者

山岸 常人 (YAMAGISHI TSUNETO)
京都大学・大学院工学研究科・准教授
研究者番号：00142018
小林 准士 (KOBAYASHI JYUNJI)
島根大学・法文学部・准教授
研究者番号：80294354

(3) 連携研究者

平 雅行 (TAIRA MASAYUKI)
大阪大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：10171399
久留島 典子 (KURUSHIMA NORIKO)
東京大学・史料編纂所・教授
研究者番号：70143534
関根 俊一 (SEKINE SHUNITI)
帝塚山大学・人文学部・教授
研究者番号：80154649
浅湫 毅 (ASANUMA TAKESHI)
京都国立博物館・学芸部・主任研究員
研究者番号：10249914
松浦 清 (MATSUURA KIYOSHI)
大阪工業大学・知的財産学部・准教授
研究者番号：70192333
大橋 泰夫 (OOHASHI YASUO)
島根大学・法文学部・教授
研究者番号：80432615
小椋 純一 (OGURA JYUNITI)
京都精華大学・人文学部・教授
研究者番号：60141503

(4) 研究協力者

和田 嘉宥 (WADA YOSHIHIRO)
米子工業高等専門学校・名誉教授
野 克之 (MATONO KATSUYUKI)

島根県立古代出雲歴史博物館・学芸グループ課長

田中 哲雄 (TANAKA TETSUO)

日本城郭研究センター・名誉館長

松本 岩雄 (MATSUMOTO IWAO)

島根県教育庁・文化財課長

鳥谷 芳雄 (TOYA YOSHIO)

島根県埋蔵文化財センター・調査第2グループ課長

花谷 浩 (HANATANI HIROSHI)

出雲市文化環境部・学芸調整官

山内 靖喜 (YAMAUTSI SEIKI)

島根大学・名誉教授

野坂 俊之 (NOSAKA TOSHIYUKI)

出雲市文化環境部・文化財課係長

石原 聡 (ISHIHARA SATOSHI)

出雲市文化環境部・文化財課主事